

『大黒舞』試論

— 祝儀物の構造と天皇 —

渡辺匡一

はじめに

室町物語は戦前の先駆的研究は存在するものの、第二次大戦後、天皇(制)とは無縁の「庶民の物語」として注目を集めたという経緯もあり、文学研究においては、現在に至るまで物語における天皇の問題については無批判なままに放置されている感がある。一方昨今の歴史学においては、脇田晴子、今谷明などにより、室町時代後期、戦国時代における失墜した天皇という既存の認識の問い直しが図られている。脇田は「戦国期における天皇権威の浮上・下」(『日本史研究』1990・12、1991・1)において、戦国時代の社会状況の中で天皇の模様が浮上してゆく様を論じ、民衆文化としての能楽・狂言・連歌などが貴族文化との融合のなかに芸術性を昇華させたため、間接的に天皇の権威に求心化してゆくとする。また、『室町の王権』以後、室町時代における天皇(王権)の問題を追及してきた今谷も『戦国大名と天皇』(福武書店1991)において、戦国大名が天皇へ接近してゆく諸相を見ることにより、戦国時代における天皇権威の高揚を論じている。拙

稿「室町物語と都・天皇—御家騒動物・復讐談における都・天皇—」は、歴史学の成果に対して文学研究の立場からアプローチを期し、『御門物語』『明石物語』『堀江物語』を考察の対象として、天皇を頂点とする既存の制度の揺らぎ、都鄙の落差の喪失という下剋上の世にあつて、戦国の世に登場した新たな階層が自らの繁昌を保証するものとして天皇を目指してゆくことを論じた。

室町物語の内、祝儀物は武家・復讐譚と同様に地方を舞台として、主人公の立身出世・繁盛を語る「庶民物」としての側面を持ち、物語内に横溢する「めでたさ」は天皇によって保証されてゆく。祝儀物における「めでたさ」は、庶民物や他の室町物語、ひいては広く文学状況としての室町の問題でもある。本論は大黒舞のテクスト分析を端緒に、祝儀物の構造と天皇との関わりを考察することによって、室町物語、文学状況としての「室町」を照射する視座を見出だそうとするものである。本論における「室町物語」は、戦国時代末期から江戸時代前期までに夥しく生み出された物語群に限定して用いる。

『大黒舞』の作品研究については、平出鏗二郎が『近古小説解題』

で紹介して以来、ようやく諸本の翻刻が出揃い、新古典文学大系『室町物語集下』に取り上げられた状態である。もつとも、現存する諸本全ての翻刻だけでなく注釈書までが存することは室町物語においては稀有のことである。先行研究としては、平出が前述書において『梅津長者物語』との比較から孝行に善果を述べる書と判じ、佐竹昭広にも民間の蘊しへ話などの比較から、孝行の重要さを力説する書とする論稿がある。また、祝儀物としての研究としては、市古貞次『中世小説の研究』以来大きな進展を未だ見ない状況である。

一、『大黒舞』の諸本

『大黒舞』における現存諸本は、以下の通りである。

A 蓬左文庫蔵 奈良絵本二冊(室町時代物語集五)

天理図書館蔵 奈良絵本二冊(山辺道18)

鎌倉英勝寺蔵 絵巻二巻(鎌倉28)

図文学研究資料館蔵 絵巻二巻(室町物語集下)

国会図書館蔵 絵巻二巻(旧赤木文庫蔵、室町時代物語大成八)

盛岡市郷土史料館蔵 絵巻二巻(盛岡短大研究報告20)

B 愛媛県下某家蔵 絵巻二巻(愛媛国文研究36)

諸本いづれも豪華な装丁のものばかりである。本論で用いる図文学研究資料館蔵本は、太巻の奈良絵巻二巻。薄青色金襴緞子の表紙。見返しには金箔を貼る。料紙は金泥草木模様の下絵入りの鳥の子紙を用いており、挿絵は鮮やかな濃彩画である。他本も国文学研究資料館蔵本と同様であり、享受層もある程度限定されよう。絵草子屋の手によるものとも思われる。A、B二類の内、B

の愛媛県下某家蔵本は正月の宴や海賊の来襲などA類と類似した部分も多く、A類から派生した異本として位置付けられそうであるが、大黒の利益へと収斂するなど物語構造にズレが生じている。また、A類の内、盛岡市郷土史料館蔵本は他の五本との間に語彙の異動が多く、物語構造にB本と同様のズレが生じている。祝儀物の構造を捉える際に、後出と考えられる二本の存在は大きいが、問題の所在をはっきりさせるために、本論ではひとまず考察の対象から外し、A類の五本を中心に論じることにする。

『大黒舞』の粗筋は以下の通りである。(■は絵の位置を示す)

- 1、吉野の里に大悦の助という者がいた。
- 2、大悦の助は親に孝行の者であった。

3、親を養いきれない大悦の助は■、清水に詣で観音に祈念したところ、藁しべを与えられ、都見物の間に■、金三両を得る。

4、正月節分の日、大黒天の来訪■。

5、大黒天の助言により、鬼を追い払う。

6、恵比寿三郎の来訪■。

7、正月の宴(恵比寿の舞・大黒の舞・誹諧・大黒と恵比寿の相撲■)。

8、大悦の助、さらに福貴となる。

9、大江山の盗賊来襲するも、大黒天、恵比寿三郎、大悦の助の郎等の活躍により盗賊を撃退■。

10、二十日余り後、修羅道に落ちた盗賊再び来襲■。大黒天の勧告により、大般若経講読。盗賊を往生させる。

11、大般若経による修羅往生の噂が都に届き、天皇の敬覧。

大悦の助、吉田の某清宗の名を与えられ、昇殿を許される。さらに壬生中納言へ娘を迎え取り、若君姫君五人を儲け益々繁盛する。

12、宴。大悦の助夫婦、大黒・恵比寿三郎を歓待。大黒の舞

13。子孫は肩を並べる者のないほど繁盛する。

島津、佐竹が指摘するごとく、主人公大悦の助が孝行ゆえに出世繁盛するこの物語の内、4から8まで続く正月の宴と、大悦の助が繁盛した後に再び繰り返される13の宴の部分に留意しておきたい。

二、『酒の泉』の構造

『酒の泉』という物語が存する。『大黒舞』同様、孝子報恩の構造を持ち、盗賊の来襲など、物語展開自体も近似している。『大黒舞』の構造の把握を容易にするため、先に『酒の泉』の構造を確認しておく。『酒の泉』は、冒頭、

(人も羨む繁盛を遂げた者は)五畿内、大和国、宇陀郡に、山かたのまこ太郎といふ者にてぞありける。片田舎の者なれども、心だては優しくて、ことに、親に孝行を尽くしつつ、

と、主人公孫太郎を「片田舎に住む孝行者」と紹介する。「片田舎」に住む孫太郎の家は貧しく、孝行に励むものの親を思うように養えないが、山に入ると鹿がころげ落ちて来る。節分の夜、蓬萊山の天帝の使いとして鬼が来訪し、「君が孝行を感じて、使えど尽きぬ黄金の袋を与える。この袋により、孫太郎は俄かに裕福になるが、盗人の疑いを懸けられ国司に幽閉される。この窮地

にも、国守宰相の元に鬼が来訪し孫太郎の疑いを晴らす。孫太郎は天帝の加護により、親に孝行を尽くし益々繁盛する。噂を聞き付けた立田山の盗賊の来襲という危機も自ら先頭に立ち見事盗賊を撃退、国守の娘婿になり、名を「山かたのおきまる」と改め、ますますの繁盛を誇る。

おきまるが栄華の極みに達するのは、庭から酒(不老不死)の泉が沸き出たことによる。国守宰相の報告を聞いた天皇は、

さておきまるといふ人は、賤しのしづの身ながら、親には類ひもなき、大孝行の道を尽くし、天道の恵みに適ひ、神仏にも憐んまれて、俄かに、有徳になり、長者と言はるゝ有り難さよ。

と、その孝行ぶりに感嘆し、おきまるは都に召される。やがて、天皇の外祖父となり、一族末長く繁栄する話末においても、「孫太郎は親に孝行私なき故に一族繁盛し、「まことにゆきしき果報かな」と貴賤上下羨まぬ者はなかつたと語られる。

主人公孫太郎(おきまる)は、その孝行という徳ゆえに蓬萊の天帝の擁護を受け福貴繁盛、「片田舎、宇陀郡」に住む「賤のしづの身」から国司の娘婿、最後には上京して天皇の外戚として一門繁盛する。『酒の泉』においては「孝子ゆえの繁盛」という、孝子報恩の構造は微塵も揺らぎを見せない。

三、『大黒舞』の構造と享受の場

ところが、同様の孝子報恩の構造を持つ『大黒舞』においては、孝子報恩の構造が正月の宴の前後から沈潜化(後退)してゆき、代りに安穩なる御代の貝現とそれに対する祝ぎという志向によつ

て、物語は展開されてゆく。

大悦の助の繁盛は、冒頭、

初めより後まで、何のものと憂きことなく、行く末久しく榮へて、子孫繁盛したる事は、吉野の里の大悦の助と云者なり。

これ、ひとへに、親孝行の故とぞ聞えし。

と、『酒の泉』同様、親孝行ゆえとされる。その孝行ぶりは漢文帝、大舜に比され、孝行の怠りなき事が語られる。清水観音の感応は、「汝は親孝行の者なる」と、大悦の助の孝行に対するものであり、観音の利益によつて福貴になつた大悦の助はいよいよ親孝行に励んでゆく。正月の宴に合わせたかのごとく、元旦未明に登場する大黒天も、「御身は親孝行の人とうけ給はり、めでたきことに思ひ、我らも御宿を借りて住まばやと思ひ、これまで罷り候」と、大悦の助の親孝行に感心した由を述べる。

ところが、大黒天、恵比寿三郎を交えての正月の宴の後、かやうに、福の神集まり遊びたはぶれて、大悦の助は福貴になることを喜び、守らせ給ふゆえに、何かはもつて悪しからん、次第に家富み榮へ、眷属おまた召し使ひ、四方に蔵をあらまた打たせ、出入る人、数知らず、福貴榮華の身となり、二人の親をかしづき、いよく孝行なしける

と、親孝行に励む七悦の助の姿を見るのを最後として、これ以後『大黒舞』は、大悦の助の親孝行については一切語らなくなる。冒頭において、大悦の助の繁盛は親孝行ゆえであることが語られていることから、孝子報恩の構造は話末に至るまで存在しているとは考えられるが、正月の宴以後、沈潜化(後述)してしまふのである。

正月の宴の後、孝子報恩の構造の沈潜化と呼応するかのようによ、物語は安穩なる御代の具現・維持を強く志向してゆく。正月の宴における大黒と恵比寿三郎の舞の詞章は以下の通りである。

大悦と聞けばめでたの名や、子孫の末まで末広がりをおつ取つて、舞ひ納めうよな、嬉しやな。君が代は千代に八千代にさざれ石の巖となりて苔のむすまで(恵比寿三郎の舞)

一に依踏まへて、二ににつこと笑ふて、三に酒作りて、四つ世の中良ひよように、五ついつものごとくに、六つ無病息災に、七つ何ごとないやうに、八つ屋敷広めて、九つ蔵を建てならべ、十でとうど納まる御代こそめでたかりけれ(大黒の舞)

大黒天は最後に「十でとうど納まる御代こそめでたかりけれ」と、正月の宴を、御代のためたさを祝いで舞納める。恵比寿三郎の祝言も大黒の舞と同様であろう。『大黒舞』において、正月の宴は安穩なる御代の具現であり、福神達はこの祝祭を祝いで止まない。

正月以降も「福の神集まり遊びたはぶれて」と維持され続ける宴の空間は、大江山の盜賊の來襲によつて危機にさらされる。盜賊に敢然と立ち向かう大黒天、恵比寿三郎の決意は、大悦の助の宝物を守るといふところにはない。大黒天の決意は以下のごとくである。

我、慈悲深き身なれば、殺すは実に不便なれども、これほどの悪人を助けおきなば、ともに引かるゝ人幾千方もあるべし。いでく、うち殺してあまたの人を救はん。

慈悲の神である大黒天は、悪人によつてさらに「この世に悪人が増えること」を防ぐために盜賊達を小槌で次々と打ち殺す。恵比

寿三郎も「我も悪人を示し、善人になさばや」と大黒天に続く。盗賊の撃退は、正月以降続いてきた安穩なる御代の回復であり、「かくて盗人どもは悉く引き退きぬ。今は何の思ひもなく、ひめもす、夜もすがら、歌ふつ舞ふつし給ふ」と、宴が再開されることになる。

ところが、盗賊達は修羅となって来襲し、世の平穩は再び乱される。大黒天の指示によって行つた大般若経講読による修羅往生も、盗賊撃退と同様の意味を持つものとして意識される。

導師、高座の上にて、啓白の鐘打ち鳴らし給ふ時、かの盗人どもは、いづくともなく忽然として来たり、本尊を伏し拝む西には紫雲たなびき、異香薫じ、花降れば、この盗人どもも重罪ことごとく減じ、修羅の苦患をまぬかれ、たちまち極楽世界に至るかと思見えにける。

修羅の来襲と往生の部分は『太平記』卷二十六「大森彦七の事」を下敷き書き替えたものであるが、『太平記』では正成等の怨靈を一時的に鎮めるところに止まる。一方、『大黒舞』においては、修羅は往生させられ、御代に対する脅威は完全に断ち切られることになる。修羅往生の後に大般若経の功德を語る部分は象徴的である。

実なるかなや、天竺の斑足王は仁王経の功德によつて、千人の王を害することを止め、我朝の盗人、大般若経講読の結縁によつて、三毒をまぬかるゝことを得たりき。実に鎮護国家の経王、利益人民の要法なり。

大般若経は「鎮護国家の要法」として評価され、大悦の助は大般若経講読によつて御代を修羅の害から守つたことになる。

そして、「この事、都に隠れなかりしかば、帝もこれを聞こし召されて」と、事件の顛末を天皇が聞き及んだところが、大悦の助が都へ召され、繁盛する契機となる。大悦の助は、孝行の者としてではなく安穩なる御代を確保した者として都へと迎えられ、自身は中納言へ、息子達はそれぞれ中將、少將へと、一門繁盛に至る。話末、三度の宴が催され、回復、具現した安穩なる御代は謡曲『高砂』の詞章を用いた大黒天の舞によって盛大に祝がれ、『大黒舞』は大団円を迎える。

「鳴るは滝も水、日は照るとも、よも絶えじ、絶えぬ流れの水、命は千歳を重ねべし、天つ下根も治まりて、げにめでたさぞ、限りなき、枝を鳴らさぬ御代なり。神と君との、道すぐに、還城樂に、君が代は御さながら悪魔を払ひ、治まる手には、寿福を抱き、千秋樂は民を撫で、万歳樂には命を延ぶ相生ひの松風、颯々／＼の声を樂しむ、颯々／＼の声を樂しむ、げにや仰ぎてもこともろかや、かゝる世に住める民とて豊かなる、君の恵みは有がたや」

『大黒舞』において具現された安穩なる御代は、同時に、正月の「めでたい」宴の空間を意味するが、このような『大黒舞』の志向は、実は正月の宴以前、漢文帝・大舜話や恵比寿三郎の登場においても確認できる。

物語冒頭、大悦の助の孝行ぶりを示すための例として挙げられる『二十四孝』の漢文帝・大舜話の話末は以下の通りである。

かたじけなくも、四百余州の御主の身として、かくの如きの御ことわざはいと尊かりし御心ざしなりき。かるが故に、代も豊かに、民の寵も賑はひけるとなり。(漢文帝)

遂に天下を譲り給へり。これひとへに孝行の深き故なり。
(大舜)

『二十四孝』では大舜↓漢文帝の順に話が載るが、『大黒舞』では順番を入れ替え、漢文帝の方が先に来ている。漢文帝の話末に注目すれば、孝行ゆえに即位し「天下を安穩に治める者」として漢文帝・大舜は意識されていると言える。『大黒舞』は、孝行を安穩なる御代を作り出すための「徳」として捉えることにより、漢文帝・大舜に劣らない孝行者である大悦の助が御代に寄与することを冒頭において既に暗示していることになる。そしてこの漢文帝・大舜話における安穩なる御代へのまなざしは、正月の宴へと向けられてもいる。

大黒天の元旦未明の登場は、正月の芸能・風俗である大黒舞を念頭においたものであるが、恵比寿三郎も正月の風俗との関わりの中に登場したと考えられる。新大系『室町物語集』の釈文では、恵比寿三郎の名乗りを聞いた大黒が「さては我が恵比寿（わかえひす）の御座なれとて、烏帽子、狩衣着し、御迎ひに出て此方へ」と請じる。つまり、「我が恵比寿」→大黒天と常に並び祭られるという意味で恵比寿三郎を迎え入れたと解釈するが、恵比寿三郎の登場は、むしろ「若夷」という習俗を下敷きにしたものと考えられる。「若夷」は『滑稽雑談』一三「若夷」に、

元朝未明に、大黒神と夷殿の図像を版行にして、人の門戸を敲て売ありく事、都鄙に有事也。諸人福の神うるといふて買もの多し。是を若夷と称す。

とあり、『醒睡笑』にも若夷の話が見られることから、近世初期には既に広く知られていた習俗であることが確認できる。恵比寿

三郎が「若恵比寿」を下敷きにして登場する時、『大黒舞』における正月の宴の意味はさらに重いものとなる。

安穩なる御代Ⅱ正月の宴へと収斂してゆく『大黒舞』の志向は、大黒天・恵比寿三郎が正月に合わせて登場することや、正月における恵比寿三郎の舞と同様、大悦の助一家に向かい祝ぐ大黒の舞の絵が、再び話末に取り入れられ物語が締め括られることからも了解できる（絵一、二）。そしてこの志向は『大黒舞』の享受の在り方と不可分の関係にある。

かゝるめでたき草子なれば、まづ正月の読み初めに此草子を読み、（つるかめまつたげ）高安六郎藏奈良繪本）

まづまづ、めでたきことの始めには、この草子を御覧じあるべく候（『文正草子』澁川版）

昔は正月吉書の次に冊子の読初とて、女子は文正草紙を読みしとなり（『用捨箱』）

祝儀物が正月のめでたい場で読まれたことはよく知られている。『大黒舞』の話末には享受の場を示す言葉はないが、その志向を考えた場合、他の祝儀物同様に正月の場で広げられ読まれた物語であったと考えられる。『大黒舞』によつて具現された安穩なる御代や祝ぎは、テキスト内部で閉じられることなく、享受されるめでたい正月の場、享受者へと繋がってゆく。諸本A類の内、『大悦物語』と名付ける国会図書館本以外は、全ての諸本が『大黒舞』とする意味もここにある。物語外部に向かって開かれたテキストである『大黒舞』は、正月、人々の元を訪れ、祝ぐ芸能である大黒舞同様、正月、この物語を聞き、読む者を祝ぐテキストとして、祝儀物の一翼を担うと言えよう。



(絵 一)



(絵 二)

四、芸能の物語化と天皇

『大黒舞』という題名からも伺えるように、このテキストを成り立たせた基底には、正月の芸能・風俗である大黒舞がある。正月を祝ぐ芸能の存在が、『大黒舞』のようなテキストを生み出したと考え得るが、他にも同様の志向を持つテキストが存する。諸本異動の激しい『鶴亀松竹』の内、謡曲『鶴亀』と『岩根山』を元にした高安六郎藏奈良絵本『つるかめまつたけ』二冊である。『室町時代物語集五』の解題によれば、表紙は紺地に金泥で草木を描き霞を引き、金砂子を散らす。見返しは布目を押した鳥の子紙に

金箔を散らす。料紙も鳥の子紙である。『大黒舞』同様に豪華な装丁の本であり、享受層も重なってこよう。「つるかめ」の部分は、正月に合わせ蓬萊宮の鶴と亀が来訪し、天皇の御代を祝ぐという筋立てであり、「つるかめ」の部分だけで独立する本も存在する。謡曲との相違として注目されるのは、物語では鶴と亀の出現を正月に設定するところである。正月、天皇の前に現れた鶴と亀は、

四海の波も静かにて、草木・国土・万人に至るまで、豊かに榮へて、千代万代と、鶴と亀との相舞ひて、千秋万歳と舞ひ納むれば、(中略)これひとへに、君聖王にて御座ます故とかや、天下太平、国土安穩、鶴亀は、千秋万歳の限り無き例に言ふ初めとかや

君が代の久しかるべき例にはかねて添ふべし住吉の松⁵⁰と、千秋葉・万歳葉、千秋万歳を舞う。正月というめでたい舞台を顕現させ、御代への祝ぎに終始する「つるかめ」は、『つるかめまつたけ』話末の「まづ正月の読み初めに読」まれるという享受の在り方から、『大黒舞』同様、めでたい正月の場を作り、安穩なる御代を祝ぐという形で、享受の場Ⅱ正月の宴の場へと結ばれてゆくテキストであると言えよう。

御代への祝ぎという形で物語外部と結ばれてゆく『大黒舞』、『つるかめまつたけ』の二つのテキストの共通点は、ともに芸能の大黒舞、千秋万歳の物語化というところにある。先学によって掘り起こされ、⁵¹ 昨今歴史学において注目を浴びていることに、⁵² 室町後期以降、千秋万歳・大黒舞等の雑芸が客庭の祭儀の中に組み込まれるという現象がある。

文明一〇(一四七七)年、一月四日(御湯殿の上日記)

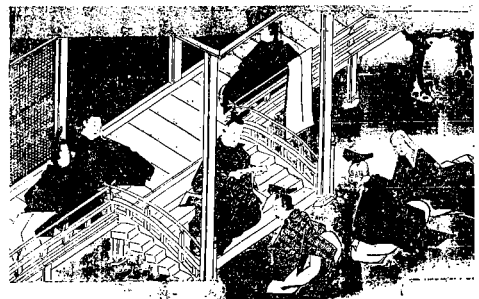
大こくかたう千しゆ万さゝ申。

長享二(一四八八)年、一月十八日(実隆公記)

今夜三毬打、殿上人等先々進上之、大黒衆拍子也、尤有興。

客廷において祭儀化された千秋万歳や大黒舞の祝ぎを享受する者は天皇である。『日本歌謡集成』所載の「禁中千秋万歳歌」も天皇の御代の祝ぎに終始しており、千秋万歳や大黒舞が内裏において、天皇の御代を祝ぐことには何の問題もない。一方、芸能と同様に御代を祝ぐ『大黒舞』や『つるかめまつたけ』においては、共に豪華な装丁を持つものの、その享受者を天皇に限定することにはかなり無理がある。『大黒舞』や『つるかめまつたけ』の存在は、宮廷に撰取された千秋万歳や大黒舞等の芸能が、逆に一般社会へと広まっていったことを意味しているが、そこで問題となるのは、なぜ御代への祝ぎに天皇への祝ぎではなく、御代への祝ぎに享受者への祝ぎという関係を持つ、『大黒舞』や『つるかめまつたけ』のようなテキストが許容され存在するのかという点である。

『大黒舞』と『酒の泉』を改めて比較してみると、前述したように『酒の泉』においては、主人公孫太郎は、鄙↓都、しずのを↓国司宰相の婿↓五位侍従↓天皇の外祖父と、天皇を中心とする仕組みの中をひたすら上昇してゆくことよって繁盛に至る。ところが『大黒舞』では、大悦の助の住吉野は都に対する「鄙」という捉え方をなされず、大悦の助は「あやしのしずを」のような身分的な位置付けもなされない。『酒の泉』『大黒舞』は、奥州、



(絵 三)

播磨を舞台とする『師門物語』や『明石物語』などの武家物と同じく地方の物語として捉えられるが、『大黒舞』には『明石物語』『堀江物語』などと同様、都の下に平伏する地方は存在せず、天皇を頂点とするヒエラルキーも揺らいでいる。既存の制度が揺らぎ倒壊しつつある戦国の世を投影する物語世界の中で、福貴繁昌してゆく大悦の助は享受者そのものと言えよう。大悦の助は、修羅の往生を機にいきなり「都」の「天皇」へと結び付く。『大黒舞』は繁盛を保証するものとして、安穩なる御代の象徴たる天皇を改めて見出たのである。このことは天皇御覧の図に天皇が描かれないこと(絵に天皇が描かれないことは院政期以後の絵巻物など物語全般に通じることではある)とも重なる(絵三)。「大黒舞」や『つるかめまつたけ』等の祝儀物がともに豪華な装丁を持つことを考え合わせると、「安穩なる世界(御代)」は、享受者一抬頭してきた新たな富裕層の繁盛を約束するものとしての、祝儀物の提示と言える。下剋上の世の中、自らの力で成り上がってきた享受者の繁昌は、安定した世により約束される。安穩なる御代への祝ぎは享受者への祝ぎに他ならず、御代の象徴としての

天皇が顕現する。

五、天皇と蓬萊宮、君が代の変奏

祝ぐ場を支える価値観として見出された天皇・都は、蓬萊(宮)と重ね合わされることにより高次に象徴化される。この趣向は古来からのものであるが、特に祝儀物において顕著であることは一考を要する。蓬萊宮と重ね合わせることによって天皇・都は物語世界の中心として君臨する。『禁中千秋万歳歌』にも同様の趣向が見られるが、『ふ老ふし』(大阪市立美術館蔵巻)では、

天皇と間守の命、たゞ二人、この方術を伝へて、不老不死の寿を保たせ給ひて、四海波静かに、治まる御代の標とて、麒麟は御園に來たり、鳳凰は御薄の水に影を写し、天下太平の徳を現し、国土安穩の恵みを示し、五日の風枝を鳴らさず、十日の雨土を破らず、五穀成就し、民榮へて、尽きせぬ御代とぞ聞こえし。

と、不老不死の薬が蓬萊宮から都へと伝來した結果、都は蓬萊宮と姿を変え、安穩なる御代の具現をもって物語は幕を閉じる。『つるかめまつたけ』の「まつたけ」物語では、日向国岩根山に現出した蓬萊境に、時の懿徳天皇が遷都をし、神の誓いに御代をめでたく守られる。『酒の泉』においても、孫太郎の邸宅は蓬萊宮のごとく語られ、ここから沸き出た酒の泉(不老不死の薬)は、都の天皇の若返り⇨御代の復活を促すことになる。

『大黒舞』においても同様の趣向が確認できる。『大黒舞』における地名は、他の室町物語と同じく享受者の共通認識のもとに設定されている。大悦の助の祈請の場は、先行する薬しべ話(今昔

物語集』『宇治拾遺物語』、『古本説話集』所収)が長谷寺とするのに対して清水寺に設定される。『大黒舞』の薬しべ話は、鼻血の止血に小指を結えたり、馬の治療に「千段の針・多麻鬼の針」など針を用いたり、伝承文芸との交渉も伺えるが、清水寺は『さよひめのさうし』『道成寺縁起』『秋月物語』『鼠の草子』等の室町物語に申し子、男女の出会いの場として再三登場する霊場である。

岡見正雄が「御伽草子絵について」(『日本絵巻物全集』18)所収1968)で詳述するように、室町物語における清水寺は諸願成就を約束する場であり、『大黒舞』もこの共通認識に従い清水寺としたと考えられる。清水寺と同様、盗賊の本拠地は「酒吞童子」等と共通認識として大江山に設定される。大悦の助の住む吉野は、古代以来の神仙境・蓬萊宮として意味付けられていると考えられ、大悦の助や大黒天・恵比寿三郎の上京は、吉野⇨蓬萊と都の一体化と捉えることができよう。

祝儀物が天皇と蓬萊を重ね合わす意図は、蓬萊にまつわる不老不死の薬をもって長久なる御代を導き出すところにある。一方で、このレトリックは、「まつたけ」物語に、長寿を全うし神と顕じた老夫婦が、「天子の御代をいやましに、めでたく守り奉らん」、「(参詣する人々に)寿命もたちまち授け給ふなり」と誓約することく、「御代」の長久とともに、参詣者(享受者)自身の「寿命」の長久が引き出され、象徴化された天皇と享受者は重なり合うことになる。

また、このレトリックは、『さざれ石』の主人公さざれ石宮が、薬師如来から授かった不老不死の薬を飲む場面において、

良薬をなめ給ふに、あまき味はひいふはかりなし。青き壺に

白き文字あり。よみて御覽すれば、歌なり。⁽¹³⁾

君が代は千代に八千代にさざれ石の巖となりて苔のむすまで

と、長久なる御代を祝ぐ「君が代」歌の「君」が天皇を指さずに、「さざれ石岩」という特定の人物の齢の長久なることを祝ぐ歌へと変容することにも繋がる。

祝儀物が、享受者を天皇と向かい合う形で祝ぎ、天皇の御代と享受者の御代を重ねあわせた時、「君が代」歌は変容する。『大黒舞』における正月の恵比寿三郎の「君が代」歌が、「大悦と聞けばめでたの名や、子孫の末まで末広がりをおつ取つて、舞ひ納めうよな、嬉しやな」との祝ぎに続く時、天皇の代と享受者の代は重なり合つてゆく。また、『梅津長者物語』における宴において、福祿寿が「君が代は天の羽衣まれに着て……」の歌に続けて「子孫もことに繁盛し、寿命も長くいきの松、幾千代かけて悦びの、御酒を、いざやすゝめむ」と、主人公左近のせうを祝ぐ時も同様である。『小男の草子』諸本中、最も祝儀物としての性格の強い旧赤木文庫蔵本には、話末部、主人公小男と上臈がそれぞれ五条天神・観音と現れ、神々の靈験を説いて物語を終えた後、以下の文言が書き加えられている。

君が代は千世に八千代にさざれ石の巖となりて苔のむすまで

君が代の久しかるべき例にやかねて添ふべし住吉の松何事も心に適ふ御代なれば、なを行く末は栄へ榮ふる。⁽¹⁴⁾

ここに見られる「君が代」、「御代」への祝言は、祝儀物たる『小男の草子』を広げた享受者へと向けられていると考えられる。

「君が代」歌は、享受者の繁昌を天皇と直接結び付けたことにより変容し、享受者を祝いで止まない。

祝儀物において、天皇は享受者を支える価値・制度として象徴化され、享受者と向き合う形で呼び込まれる。戦国時代という動揺する社会状況において台頭してきた享受層の繁栄は、瓦解しつつある既存の天皇を頂点とする制度、価値体系においては保証され得ない。祝儀物は、享受者の繁栄を約束し得る価値として天皇そのものを改めて提示する。古代以来積み重ねられて来た知識、広義の文学の集積を元に、蓬萊客と重ね合わせ、高次に象徴化された天皇は直接享受者と結び付けられ、享受者の繁栄を保証してゆく。安穩・長久なる御代の象徴としての天皇を現出させることにより、祝儀物は室町以後も普遍性を獲得し得たと言えよう。

本論では、『大黒舞』を中心に祝儀物の構造と、物語を支える価値としての天皇に焦点を絞って考察を進めてきた。『大黒舞』については、諸本の問題や類話『梅津長者物語』との関係、また祝儀物としては『文正草子』、『梵天国』など多くの物語の考察を残している。特に絵に込められる祝儀性・祝祭性の問題は今後の課題となる。天皇・都の問題に関しては、武家・復讐譚、祝儀物など、地方の物語を中心にみてきたが、逆に貴族が地方へと流離する公家物などの考察も不可欠である。また、洛中洛外図の流布といった動きとの関わり、絵と天皇の問題については次稿でさらに検討したい。

- 注(1) 『日本文学』 1993・7
- (2) 『蘆しべ長者のこと』 『民話の思想』 1973平凡社
- (3) 本文は、国文学資料館蔵本(新大系『室町物語集下』)を用いる。
- (4) 『室町時代物語大成六』の本文に私意に漢字を宛てた。
- (5) 『滑稽雑談』 1978ゆまに書房。
- (6) 東大図書館本(『新本大系』2)「祝落多」に、恵比寿の版木を刷る者が恵比寿と間違えて三途川の姥を刷ってしまったが、恵比寿の母親だと偽って売りさばいた話載せる。
- (7) 『室町時代物語集五』の本文に私意に漢字を宛てた。
- (8) 『御伽草子』岩波文庫。
- (9) 『日本隨筆大成13』。
- (10) 『室町時代物語集五』の本文に私意に漢字を宛てた。
- (11) 岩崎小弥太「千秋万歳と大黒舞」、金井清「福福神狂言の形成」ともに「大黒信仰」民衆宗教史叢書29 1990・2雄山閣出版、守田嘉徳「千秋万歳の研究」、『中世賤民と雑芸能の研究』1997雄山閣出版など。
- (12) 今谷前掲本において問題視されている。
- (13) 『統群書類従』補遺二。
- (14) 『実隆公記』統群書類従刊行会。
- (15) 『室町時代物語集五』の本文に私意に漢字を宛てた。
- (16) 『御伽草子』岩波文庫。
- (17) 『室町時代物語大成四』の本文に私意に漢字を宛てた。